



手がかりを準備しておく。
・くり返し学習できる機会をつくる。
・評価を細かにして、わずかな変容
に対しても賞賛できるようにする。
学習で得た喜びは、自信となつてさ
らに学習にはずみをつけるようになる。
次に、S子への指導を紹介する。
S子は脳波異常児、IQ三十五。中
学二年生の秋に、ようやく数字の読み
書き(一から十まで)を覚えた。その
後のS子は、表に示したように、みず
からの力で生活の場を広めていった。
第一、第二段階では、数字を覚える
ことによつて、いろいろな生活に仲間
入りができることを悟つたこと。第三
段階では、遊びや係活動の中で自己実

現の喜びを味わえたことが大きな励み
となつて、この学習を発展させること
ができたと考ええる。
(みんなといっしょにやりたいから)
(一生懸命がんばるよ！)
(がんばるから、先生ノ見ててね)
この目にも見えない、耳にも聞こえ
ない子供たちの訴えを聞き取ること。
このことこそ、教師が留意すべき最も
大事なことのよう思う。

(一) はじめに
障害の重度化とともに、障害の多様
化が進んできている。重度の脳性まひ
は、発育初期の脳損傷により、重い運
動機能障害のほか、知能障害、感覚
障害、性格、行動、情緒等の随伴障害
がみられ、その程度により発達の様相
もさまざまである。運動機能の障害に
より、乳幼児の時期から必要な経験が
与えられなかったり、また、習得され
ないまま就学期を迎えてきている。

日常生活基本動作や身辺処理能力、こと
ばの習得、遊び、集団参加等の経験が
不足し、それらのレイブネスが備わつ
ていない状態である。また、聞く、話す
読む、書くなどの能力や、ことばの理
解力、数える等の学習レイブネスも未
発達である。このような障害児の指導
は、個々の発達段階や障害に応じた指
導をし、個別指導の段階から、次第に

(二) 肢体不自由教育
県立郡山養護学校

集団思考に耐える基礎的能力を身に付
けさせることが重要である。同時に、
集団の中で、他の子供の相互作用を
図つて指導することもたいせつである。
(2) 授業の中で配慮している事項
① 実態のは握

臨床的観察や心理学的検査等で発達
段階や障害に対する配慮事項等を的確
には握し、一人一人の問題点を
おさえ、指導目標や指導計画をたて、絶え
ず評価しながら指導している。特に、
障害の重い子供の行動の変化は、少な
いので、どのような指導をし、どのよ
うな行動の変容があつたのか評価して
いくことが重要である。

② コミュニケーション

言語障害は、障害の程度や種類によ
つて異なるので、特に配慮が必要であ
る。例えば、緊張がリラックスするふん
い気を作り、話す意欲を育て、話した
ときに賞賛し、話す機会を多く与え
るような配慮をする。さらに、教師が
しっかりと聞き取る態度と耳をもち、子
供の能力に応じて、読む量や話す機会
をくふうし、活発に言語活動ができる
ようにしている。内言語がありながら
話せない場合は、音読表による指さし、
筆談、電動タイプ等の補助手段による
意思の疎通を図っている。特に、留意
するのは、表出言語のない子や、内言
語に乏しい子の場合である。

ア 教師の言語指示に反応を示す。

例 「ハイ」、「イエエ」の反応
イ 子供の表情や身体反応から教師

が子供の要求を読みとる。
例 からだのもじもじ動作
一人一人身体反応が異なるので、入
学時に、母親からよく聞いておくこと
は、指導上重要である。さらに、それ
に従つて、子供と教師のサインを増や
していくことを指導事項に加えれば、
より密接な人間関係ができ、教育の効
果があがる。

③ 生活経験の拡大

子供の障害が、重度であればある程
経験領域が狭いので、遊びや戸外活動
など具体的経験をする機会を多くもつ
ように努める。遊びの指導では、感覚
運動的遊び、身体各部位運動遊び、全
身の平衡感覚遊び、模倣遊び等は、身
体各部の運動機能、情緒、欲求、社会
的発達等を促進するばかりでなく、コ
ミュニケーションや感覚学習にも役立
つので、多く取り入れる。くりかえし
やることにより、快的経験や自発性を
促すので、子供の能力に合わせて、自
由遊びから、だんだん、遊び方を覚え
させるよう考慮している。

また、学校、寄宿舎、学部、学級等
の校外学習なども多くもっている。小
学部一年から、花のほか、さつまいも
や豆を植え、生産学習を取り入れた。
重複障害学級では、社会や季節に関す
ることを中心に、統合学習をしている。
基本的には、障害があつても子供の
興味、関心を満足させるよう努めてい
る。教科学習においては、障害や上肢
機能の状態に応じて、教具や遊具等を